

学 位 論 文 要 旨

研究題目 (注：欧文の場合は、括弧書きで和文も記入すること)

Ten-year follow-up study of Japanese patients with
obsessive-compulsive disorder

(本邦における強迫症患者の10年間のフォローアップ研究)

兵庫医科大学大学院医学研究科

医科学専攻 高次神経制御系

神経精神医学 (指導教授 松永 寿人)

氏 名 中嶋 章浩

強迫症は一般人口中の生涯有病率が約2%と比較的出現頻度の高い精神疾患である。本疾患はばかばかしく不合理と認識し、無視する努力をしながらも、ある考えや想像、衝動にとらわれる強迫観念と、無意味で過剰とわかりながら、ある行為を繰り返してしまう強迫行為からなる。OCDに対する治療ではセロトニン再取り込み阻害薬などの抗うつ薬や暴露反応妨害法といった認知行動療法の有効性が確立され、両者の併用療法が一般的である。しかしながら、この疾患の長期的転帰に関する研究は欧米のものがほとんどで本邦におけるものは我々のしる限りない。そこで、今回は10年間継続的にフォローしたOCD患者を対象に長期予後やそれに関わる臨床要因を後方視的に調査した。

初診時に、各患者の背景やOCDの臨床的特徴、巻き込み行動の有無や内容、経過、その他うつ病や自閉症スペクトラム症などの精神疾患の併存について評価。さらに強迫症状の内容や重症度はYale-Brown Obsessive-Compulsive Scale (Y-BOCS; 強迫症状重症度評価尺度) を用い、この評価を1年ごとに継続した。治療開始10年後における各患者の状態はY-BOCS得点により評価し、その得点により完全寛解、部分寛解、治療無反応群の3群に群別した。そして、初診時の背景や臨床的特徴を量的データに対して分散分析、質的データに対して X^2 検定を行い評価した。さらに、OCDの累積寛解率の推移について生存分析を、寛解の予期因子を評価するためにCox回帰分析を行った。

生存分析では、完全寛解に至る患者の割合が年々上昇していくことが明らかとなった。10年間の治療経過の中で56%が少なくとも一年間持続する完全寛解を経験していた。本研究の最終評価時には、完全寛解者が48%、部分寛解者が37%であった。そして不良な長期予後を予測する因子として初診時のGAF得点が低いこと、強迫症状への家族の巻き込み行為が存在することなど、いくつかの因子が特定された。加えて、治療開始一年後の改善率が、10年後の良好な転帰を予測しうるものであることが明らかとなった。

本研究で特定された予後不良因子 (家族への巻き込み症状、自閉症スペクトラム症の併存)、初期の治療的介入の有効性が長期予後を反映するという結果は欧米の先行研究と概ね一致していた。このことから、OCDの長期予後が、社会文化的背景の相違に関わらない、超文化的で本質的特性を有するものであることが判明した。